文久の修陵ビフォー・アフター（荒蕪と成功）

メモ）鉄本　2024.05.17

江戸幕府は文久から元治にかけて歴代天皇陵を修陵した。『文久山陵図』（新人物往来社）から仁徳陵を抜粋したものである。

1．修陵の費用と期間

陵名	費用/現在価値	割合%	修陵期間	月数
神武陵	15，062両1分2朱 約2億2440万円	全体の 17．7	文久3年5月～12月 （1863年）	8
応神陵	3，050両 約2950万円	全体の 3．6	元治元年5月～慶応元年2月 （1864年～1865年）	10
仁徳陵	595両 約575万円	全体の 0．7	元治元年9月～慶応元年1月 （1864年～1865年）	5
履中陵	595両 約575万円	同上	同上	同上
反正陵	500両 約484万円	全体の 0．6	同上	同上

（注)割合とは全工事費（約12億6780万円）に占める割合。

【神武陵の修陵】
神武陵の場所は3つの伝承があり、谷森説（所は神武田）が孝明天皇の勅裁により治定された。この場所に新造した為に工事費が他の山陵に比べ割高になっている。

【貨幣価値について】

江戸時代の貨幣価値を現在価値に置き換えることは非常に困難である。特に幕末は物価の変動が大きく、何を比較対象にするかによって換算値が変化する。ここでは、日本銀行金融研究所 HP のデータ及び明治大学 HP に紹介されているデータ（池田弥三郎編『江戸と上方』 至文堂　1965）を基に、幕末の米価による補正を行い以下のように換算した。

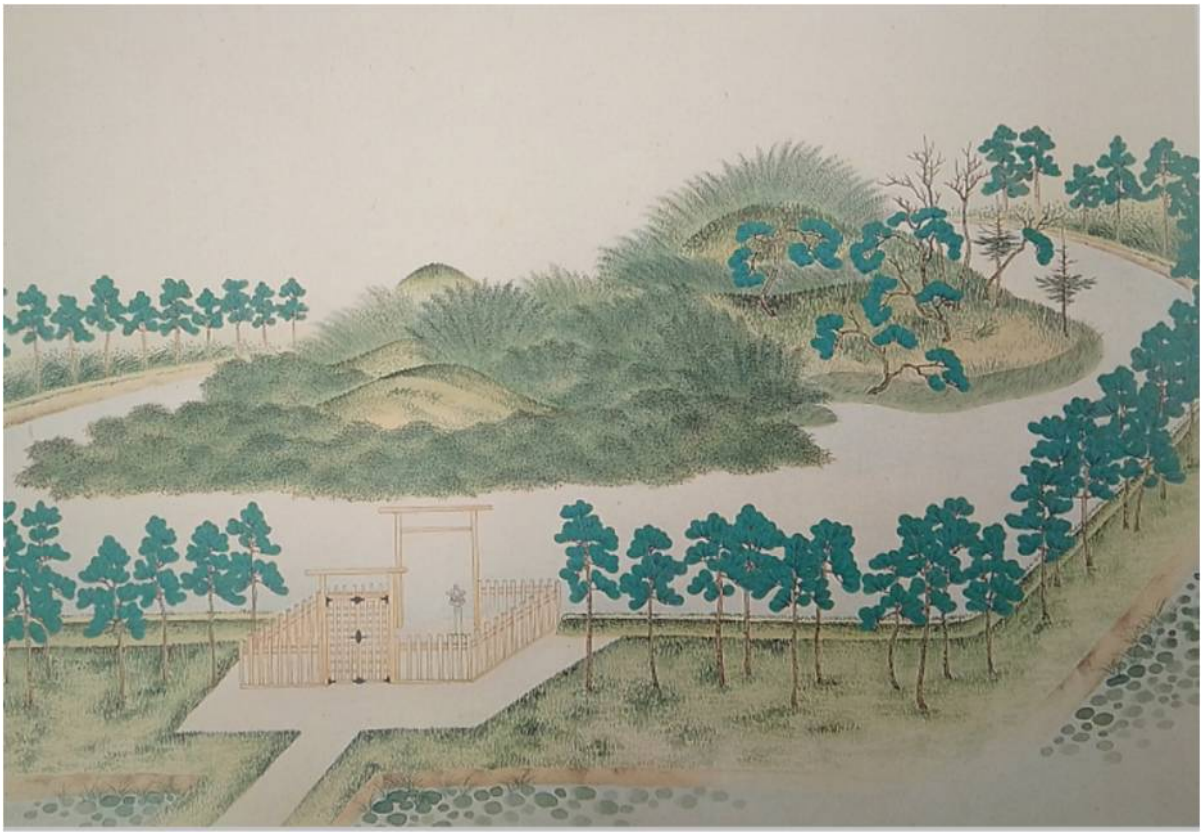
（参考）　米5kgの価格：　慶応2年（1866）は、銀 19.5 匁（3,315 円相当）　金1両＝銀60匁

年代	1両	1分	1朱	1文
文久2年	14880円	3720円	930円	1．19円
元治元年	9672円	2511円	627．01円	0．97円

2．山陵のビフォー・アフター図

（1）仁徳陵のビフォー（荒蕪図）　　鶴澤探眞　画

(2)仁徳陵のアフター(成功図)　　鶴澤探眞　画



3. 仁徳陵山陵図からみる修陵状況ついて

(1)荒蕪図(ビフォー)

①墳丘西側中央に造出しがはっきり描かれている。

②西側の中堤が切れたところは、「樋の谷」と呼ばれる排水濠で、内川につながる。

③他の山陵図では陪塚が描かれているが、仁徳陵図では1基も描かれていない。(不思議)

④嘉永5年(1852)、堺奉行の川村修就は後円部上の竹垣を石垣に替え、墳丘上にあった勤番所を後円部側の中堤に移した。

⑤後円部西北側の二重濠に橋が堤まで架けられている。ここには裏門があって勤番所の建物が見られる。

(2)成功図(アフター)

①現在の大仙公園あたりから描かれており、東側の造出しもみられる。

②前方部に面した第一堤上の約32m四方の正方形の敷地を囲って拝所が造られた。

③拝所に至る通路を第二濠に設けるため、幅10m、長さ24mの規模で埋立てが行われた。図では拝所から第二堤に延びる通路の半分ほどが描かれている。

④修陵後、苦竹や雑木はそのまま放置状態で、特に前方部にその状態がよく現れている。
(現在のような植栽になるのは、明治20～23年の植林による。)

(3)墳丘について

①本墳は三段築成であるが、墳丘等高線に乱れが著しい。これには、地震による崩壊説、未完成説がある。

②墳丘上には国見山城という城郭があったということも伝えられている。

以上